

理想乃真宗

五二



羅如生集

京朝七家集

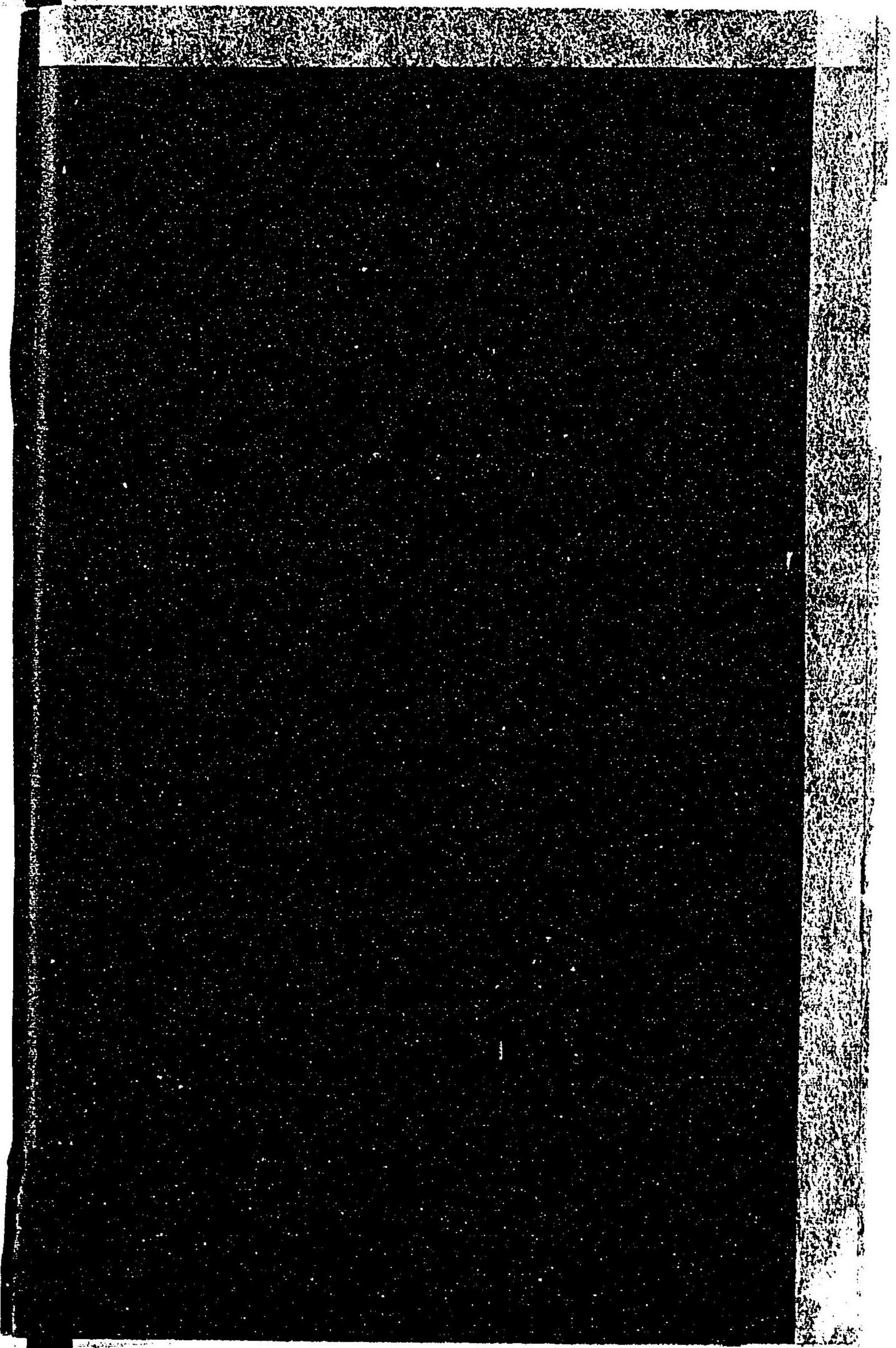
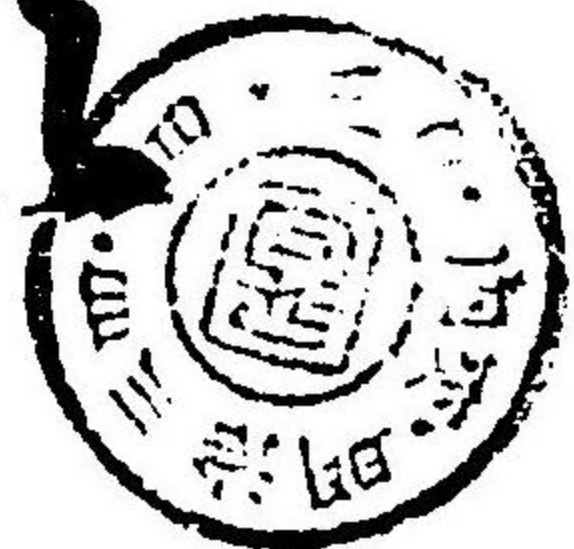


特18
508

明倫

一
道
出
生
死

一
切
善
惡
人



明治辛丑一月

圓通道人遠域



序

佛教多門、如來之慈悲廣大而方便無窮、擇一門而
如教奉行、皆有隨分之益、然而智愚齊得大益者、置
彌陀教有他哉、夫親子兄弟夫婦、生相團欒、死相分
離、是人情之所不忍、苟信彌陀歸願力、今生則信心
一味、來世則同生安養、快樂無極、而盡未來際相携
度苦衆生、人情至願有過之者乎、宜矣斯教之利益
貫三時、而諸佛齊稱讚弘布之也、今時學佛教者須
不走虛頭着實學之可也、余曾聞之故老、欲學起信
論、須從修行信心分末尾入、蓋善樹立一心于彌陀
佛誓、決得往生安養、則入彌陀心光中、蒙不退之密

益、億劫大事已辨矣、彼四信五行皆攝在名號中、彌陀所施之物、我已有不行而行之義、則從是以上解釋三項、立義一心二門、弄解於今生、期證於來世、自行化他、綽々有餘祐焉、豈非徑路修行乎、論主本旨在于茲、而論文反首尾顛倒、所謂調機方便、抑亦旁明往生之體裁歟、今也佐藤巖英子發揮微旨、欲曉世俗學佛之士、譬喻斬新、言文一致、蓋使讀者由之悟入于他力真宗、着實滿足憶劫大事、則其活動真教裨益同胞之功、實非鮮少、謂之佛祖之忠臣孝子、豈過稱哉、及序文之囑、廼欣然命筆、書卑見而應之、

明治三十三年南良後二日

法友抑堂介識

小引

著者嘗て「大乘起信論」上に躍動せる救世者の使命と題し二三有志の請に應じて講演せし事あり其の稿本を筐底に藏せり頃日學友之を梓に上せんことを勸む大方の指教を仰ぐの傍一流の信者が法味愛樂の伴侶に供するも亦報恩の一端なりと感ず杜撰を顧みず敢て印刷に附せり讀者請ふ其不遜を尤むること勿れ。

本書を「理想の眞宗」と命名せしは先輩日下大痴君にして書は洛陽の神童白井鉄秀君の健筆に成る共に拙著の榮なり仍て茲に之を記し深く兩君の好意を謝す。

京都七條猪の熊白井客舎にて

著者誌す

理想の眞宗

(起信論に躍動せる救世者の使命) 目次

第一	著者と年代	第一頁
第二	著者の佛教に對する卓見	第十四頁
第三	予の眼に映たる起信論	第十六頁
第四	一論中予が腦を刺撃したる一文	第十八頁
第五	大無量壽經の佛說なる確證	第二十八頁
第六	一論の組織	第四十五頁
第七	一心の解釋	第六十頁
第八	染相凡夫の方面に奪ひたる一心	第七十一頁
第九	淨相佛陀の方面に奪ひたる一心	第七十七頁
第十	感謝的永久の行動	第九十八頁

理想の眞宗

(大乘起信論に躍動せる救世者の使命)

佐藤巖英 著

第一章 著者と年代

釋尊御存生の當時、維摩居士と申します人がありまして、此の人は能く佛教の眞理を悟りておられた人でありました。此の人の悟と來ては、釋尊の御弟子中の菩薩方もよりつけないほどの人でありました。在家でありまして出家ではありません。然し其の悟の消息は舌を打ち節を打

つ程面白です。其の消息を書ひたのが維摩經であります。が、此の經を讀みますと心が躍り出して何たか靈界に飛び出し天外に活歩するよふな感トが致します。かゝる高雅なる悟を開いておられた人でありますれど、身は在家に處して妻子を養ひ而も巨利を得とも喜ばずとあります。すから世の生産的事業はどん／＼やつておられたものと見へます。なれども今日の人間の如く利の爲に本心を失ふと云ふよふな事のなかつた人たと云ふ事は慥かでありますが、それと云ふも今日の阿世家の如くではなく、天に恥す地に恥す自から恥ぢない、佛教の所謂宇宙の眞理を自己の精神中に探して以て消化したる信心が、心の内

に潜んで居つたからであります。今日各位が身は官途に仕へながら實業に従事しながら、各週一回づゝ貴重光陰を割ひて一ツは精神修養の爲に一ツは社會救済の爲に、佛教講話會を開かれたるは誠に喜ばしい、是れが社會の光澤と云ふべきものであります。丁度草木に於ける花の如く人生に於ける美と云ふものであります。即ち今維摩の會合とは是の會の事でありませう。今日は理想的に眞宗の話とせよとの御注文であります。から起信論の背面に躍動しつつある救世主彌陀の慈悲を御話申しまさう。それにつきて此の起信論は大乗通論と申しまさう。一大佛教の精髓を書ひてある書物で、仲

々小僧の手に合ふ書物ではありませぬ丁度正宗の名劔
を下女のお三に持たせたよふなもので、怪我するに間違
なひなれども講話として話すなら一層と思ひ、同ト怪我
するなら、名劔で怪我する方が自分も満足と思ひまして、
本題を出した次第であります。諸本題に立ち入る前に此
の書物の著者の原籍調を致さぬければならぬ、著者の原
籍姓名生年及び學問の經歷から其の行爲から、社會の師
に對する感情及び批評迄御話し申さぬければ、此の書物
の眞價値が分りませぬ、所が今日は此の研究法を歴史的
研究法とか申しまして、世間は非常に流行します、又自由
的研究法と申しまして、自己の見解から眞理を標準にし

て研究するのがあります、私が起信論に躍動せる救世
者の使命と云ふ題からが自由的と申しまして、よか我儘的
研究法とでも申さぬければなりません、偕て本論の著者
が馬鳴と云ふ名の人なる事は、昔から異論の無ひのであ
ります、が馬鳴と云ふ名の人は何人も印度にはあつたも
のを見へまして、龍樹の著にかゝる釋摩訶衍論と云ふ書
物には、馬鳴と云ふ名の人が六人も出してあります、又婆
藪槃頭傳や歷代三寶記や薩婆多記など申す書物の中に
も、何人も馬鳴と云ふ人が出てありますから、戶籍調が大
切なのであります、日本でもお菊が皿をこわしたと申し
ても、お菊と云ふ名の人は何人も昔からあるから、どこ

の生れのこの時代のお菊かと云ふ事を知らぬければ面白くない處が茲に一つ馬鳴に對する社會の感情と申しますか、本論著者の馬鳴は人間ばかりでない、畜類馬迄か師の降誕を祝して鳴號したので、馬鳴と名を御付け申したと云ふ事で、カーラアシバゴシヤと申します、アシバは馬でゴシヤが鳴であります、これで名前と名前の付ひた所以と、人間のみならず畜類迄、將來有爲の人物を世界に降し賜ひたるを祝したと云ふ事が御分になりましたる、それから馬鳴は何處で御生れ遊ばしたかと云ふに、師は西天竺即ち西印度の御出生で、御生れなされた家は婆羅門教徒の家で、家庭の内から婆羅門教に育てられて、

青年の頃には婆羅門教徒の中では學者として第一流の人物であつたので、全印度を漫遊して中天竺即ち中印度摩揭陀國に來遊中、當時中天竺に於て四天王の一人として雷名を轟せし協尊者の高弟プールナヤシヤに面會し、婆羅門教と佛教との議論を開始せられたるに、正義と真理との爲に直なる馬鳴は、婆羅門教が佛教の真理に及ばざる事を悟つて佛弟子となり、爾來佛教を研究せられた處が、師は再び小乘佛教が大乗佛教の眞理に及ばない事を發見して、新佛教の鼓吹者否大乗佛教の開拓者として其名五天に振ふに及んだのであります。其の頃端なくも中天竺摩揭陀國と、カニシガ王の治下月支國と戦端を開

八
始せられ、摩揭陀國は連戦連敗爲に物情擾しくなりたれば、摩揭陀國は講和談判を月支國に申込ませざるを得ざるに至りまじたが、其の談判の結果中天竺は、月支國に一億の償金を入るゝ事になつたのであります、茲に一つ面白ひ話は月支國より一億の償金の代に、傳道師として馬鳴菩薩を呉れよと要求したのであります、此話を聞ひて各位は如何に感ぜられますか、今日で申せば一場の小説談か滑稽談にしか思われにくい、が、月支國の國王カニシガ王が、佛教の爲に盡されし行爲から考へば事實に相違ありません、又國民も内閣諸公も參謀諸將も兵卒も満足して一億の償金の代りに、馬鳴菩薩の行を歓迎したので

あります、が、正義と眞理との爲めには、昨の戦を忘れたかの如く、道義と宗教との爲めには、國家舉つて一億の償金を顧みない精神の潔白なるには、敬服の外はないのであります、然り而して中天竺に於ては一億の償金を出さねばならぬと、上に下にと打ち擾ひでありしに、圖らざりき月支國は馬鳴菩薩を傳道師として派遣せよ、一億の償金は要しないと申込たから、國王は馬鳴菩薩に此の事を謀られたるに、道と國との爲に忠實なる馬鳴は、臣が骸骨にして國家一億の重寶に換はるならば、臣敢て辭せず、恐懼、恐懼慎んで敵國に參るべしと、況んや度生に切なる馬鳴は、敵國にして佛教を信せんとする、我れ焉ぞ化せざるを

得んやと、心中雀躍國王の命を奉トて、北方カニシガ王の治下月支國に行かれたのであります。此の御話で著者の性行學徳及び四圍の師に對する感情も師の社會に及ぼせる勢力も略ぼ御分りになりましたでありますよ。さて月支國に行かれてから相變らず、盛に朝野を感化しつゝ在りしに、時の國王カニシキヤは、阿育王以來比類なき奉佛家でありまして、大毘婆娑の大結集を企てられ、馬鳴も此の結集には與かられたのであります。此の結集に五百の羅漢を集められたるに、四百九十九人の羅漢を得たるも一人不足の爲に五百とならざれば、馬鳴の師たりしプルナヤシヤの師、脇尊者と共に四天王の一人と云はれ

た、世友尊者は未だ羅漢果は開ひてゐないけれども、學徳羅漢に優れたれば、彼一人を加へて五百人としては如何と云ふ羅漢があつたので、羅漢中には彼れは未だ羅漢果を悟つてゐないからと云つて、擯斥したものがあつたなれども、世友尊者は吾れ何を羅漢如き小果に安せん大果を期して小果を期せず、羅漢の悟ぐらゐは朝飯前の茶の子たよ、吾衣を空に飛はし故に復せざる内に羅漢果を悟つて見せんと云つて其言の如く衣を空に飛はし、未だ故に復せざる内に羅漢果を悟られたので、衆皆な舌を巻いたと云ふ事でありませぬ、その世友尊者の小果に安せず大果を期するといふ大果が、大乘佛敎の事でありませぬが、今

著者の馬鳴も婆羅門の家に生れながら、婆羅門を棄て、小乗佛教に入り研究をつみて小乗佛教に満足せずして、四周皆小乗教中なるに、大乘佛教の旗幟を立て、大乘教を自からも信ト人にも教へられ、大乘佛教の哲學的構想を論文に著して、自己の信念を告白せられたのが本論であります。師が一億の償金の代りに北方月支國に行かれたる爲に、南方佛教は小乗教隆盛を極めたるが、北方は師の爲めに月支國以北以東は安息國、中央亞細亞、支那、蒙古、滿洲、朝鮮、日本に至りて、大乘佛教の花は實を結ぶに及んだのであります。是も師の効績に歸せなければならぬのであります。所が師の年代は摩訶摩耶經の説によれば、

佛滅後六百年頃たと申す説でありますが、私の考ではカニシガ王の即位が西洋紀元後十年でありますから、佛滅後四百年代の頃で、今より二千年弱なるは勿論の事であり、ますます、随分古ひ書物であります、然るに今日になつても、世間に卓拔な議論であるとか、高妙な理想であるとか申して哲學者が珍重しますのが、今から千八百年も九百年も前の書物たとして見れば、馬鳴菩薩は大學者であつたものと見へます。西洋人は世界で一番壽命の長ひ書物は佛教の經典、其の次が基督教の聖書、壽命の一番短ひのが、新聞の議論たと申しました、本論も随分壽命の長ひ書物であります、長ひも道理であります、永久無限の生

命を有する宇宙の眞理を轉寫した書物でありますから此の書物も永久無限の長壽を致しますが各位も本論の生命にあやかつて、本論の精神に同化して頂きたい。

第二章 著者の佛教に對する卓見

著者を大乘佛教の先驅者として開拓者として崇拜するは、多數佛教者の皆俱に唱説する所でありませぬ、如何に師が佛教に對する卓見を有せしか、如何に佛教が師の爲に變態せしかを御話申さんに、三箇の要點を見出す事が出来ませぬ、其の三箇の要點とは

第一 師は理想的の眞如を實際的宗教の上に施せし

事。

第二 眞如と生滅とを結ぶに一心を以てして、法界を

一體のものと説明したる事。

第三 第一第二の要點を多趣味なる宗教的機能の上

に應用して染想凡夫の方面に於ける信心と淨想佛陀の方面に於ける攝護と信心即攝護、攝護即信心と云へる妙契を發揮せし事。

誠に師は一體と云へる眞理を發見せられたる爲に、一大佛教の上に幾層の光彩を添はられたるか知れないのであります。又師は一體を説明するに一心の名を用ひられ眞如と生滅とを一心の兩面と論ト骸骨の如き佛教の理

想を血あり肉ある實際的の佛教とせられ、蠟を嚙むが如き佛教を趣味多き佛教とせられたのであります。特に師の卓見中の卓見は、理想の友たりと佛教より救世の主なる佛教を發揮せられたにあるので、私が本題を撰びましたも、此の妙趣味を御話と致したいからであります。

第三章 予の眼に映したる起信論

私は浄土真宗を奉じて居るものでありますから、彌陀の大慈悲の外には一物も認むる事が出来ないのであります。元來真宗教徒の信念の上から見ると、彌陀の外には一物も無いからであるが、彌陀の内には森羅萬象炳然と

現ト歴然として認むる事が出来ませんが、皆な彌陀の化身として映するか、彌陀として映するか、雀の忠々鳥の孝々山の景色の夏に榮ゑて冬に枯れ、遠山寺の暮の鐘までが諸行無常を教へるかの如く、聞こゆ鶯の音は法を聞けと聞こゆ、櫻の花を見るにつけても、いと願はらば西の彼岸と思ひ出で、宇宙の總べては阿彌陀經に説かせられてある如く、皆是阿彌陀佛欲令法音遷流變化所作には非ざる歟と感ぜらるゝ位であります。弘法大師も同感であつたと見ゆて、蟬登高樹轉法輪、蛙上荷葉唱正覺とも口吟せられた、又た溪聲盡是廣長舌、山色無非清淨身と、蘇東坡は詩に賦まれてあります。況んや著者が起信論中修多羅に

曰くとして、四信五行の外に彌陀の大悲を泄らすもの、淨土眞宗の元祖法然上人が此論を取りて、眞宗傍明の論藏と判せられたのも實に深い理由のあることであります。然れば此の論を讀んで多少の感慨を惹起せられない事はないと考へて其所感を告白するが本題の骨子であります。

第四章 本論中予が腦を刺撃したる一文

本論は元より其原書は、サンスクリットでありましたものを支那に翻譯された事が前後二回でありまして、現今一切藏經の中に二本とも加へてあります、其の前回の

翻譯は佛教の學者眞諦三藏の手によつて譯せられたもので、其の年代を云へば梁の世承聖三年九月で、吾朝では欽明天皇十五年に當りまして、今から千三百四十六年前の事であり、其の後回の翻譯は實叉難陀と云へる三藏の手によつて譯せられたもので、唐朝大周聖曆三年十月で吾朝では文武天皇五年に當りまして千百九十九年前の事であり、其の前回所譯の本を舊譯の起信論と云ひ、後回所譯の本を新譯の起信論と申し、此の新舊兩譯の起信論を照し合して見まするに、非常な相違はありませぬなれども、譯語に僅かの異點を見出す事が出来、而して此の兩譯起信論中特に私の腦裡に刺撃を與

へたる文と申しまするは止觀を明してある次の文で一番終りの所にある言であります。

復次衆生初學是法欲求正信其心怯弱以往於此娑婆世界自畏不能常值諸佛親承供養懼謂信心難可成就意欲退者當知如來有勝方便攝護信心謂以專意念佛之因緣隨願得生他方佛土常見於佛永離惡道

と立論して其れを立證するに經を引ひてあります其の文は

如修多羅說若人專念西方極樂世界阿彌陀佛所修善根回向願求生彼世界即得往生
と經を引ひて釋義を附してあります文に

常見佛故終無有退若觀彼佛眞如法身常勤修習畢竟得生住正受故

と結んであります此の修多羅の文と云ひ釋義と云ひ、淨土眞宗所依の無量壽經なる事は明でありますなれども無量壽經中此の儘の文は見事が出来ない、而して此の文の儘では二十願か十九願が當然である、それは所修善根回向の文を見れば十九願かと思はれ、專念西方極樂世界阿彌陀佛の專念の二字より眼を着けるときは餘行餘善を遮したる趣があつて、二十願かと思はれるなれども、又沈思黙考能く全文に眼を注げる裡に無限の情を惹き起して能く々々味ひ來れば阿彌陀佛の本願淨土眞

宗安心の依憑たる眞實の第十八願成就文には非ざる歟
 と考へるのであります、如何となれば此の文を一應見る
 時は、殆んど二十願文と近きが如くなれども、舊譯の本に
 は即得往生と云ひ、新譯の本には決得往生と申してあり
 釋義の中も畢竟得生譯と云ひ、命終必得生譯と云ひ、又學
 者によつては常見佛故終無有退と云ふ文迄を修多羅の
 文たと申す人もあるので、此の住不退轉の益などは、二十
 願と申す事は決して出來ない、そこで私は第十八願成就
 文であると考へるのであります、すると成就の文と今の
 修多羅の文と相違しては居らないかと申さるゝならん
 が、今私は譯書と譯書の上で一言半語も相違しないと云

ふのではありませぬ、原書の意味が如何にぞも譯せらる
 るであらふと思ひます、特に佛教の如きは意味に於て大
 なる異を生ずるものでありますから直譯ばかりで決
 て行けない、そこで意譯となると譯者譯者に依つて、其文
 字は變りますすなれども其の意味は變らない、今此の起信
 論が眞諦三藏と實叉難陀と兩人に譯されたばかりであ
 るに兩譯の間に相違の點を認むる事、一方に決得往生と
 譯せるものを、一方は即得往生と譯するが如き、一方に命
 終必得生と譯せるものを、一方は畢竟得生と譯するが如
 く、大無量壽經は五存七欠と申して、本朝所傳は五譯未渡
 のものが七譯と合せて十二譯もあるのですから、此の十

二譯を照合てらあはするときには起信論きしんろん所引よびの修多羅しゆたらかの文と、無量壽經むりやうじゆの十八願成就文じゆじゆと、同文なる事を發見はつけんする事が出來得るうたろふと思ひます、如何いかとなれば意味いみに於て均ひとしく文ぶんに於ても殆たんど接近きやくしんしておると思ふから、今此處こゝに成就文じゆじゆぶんを書ひて細字さいじで起信論きしんろん所引よびの修多羅しゆたらかの文を註ちゆして御目ごめにかけまして御判斷ごはんぱんを願ひたい

諸有衆生しようじゆじゆ人にん若し聞其名號信心歡喜乃至一念しんねん專念せんねん西方極樂しやうはうきやく至心回向しんくわう根こん回向くわう願生彼國げんじゆへいこく彼世界へいせかい即得往生じやくとくじやうじゆ住不退轉じゆたふたいせん見常けんじやう

佛故無有退

此の細註さいちゆを釋義しやくぎする中に舊譯きうやくでは畢竟得生じやくじやくとくじゆと云ひ、新譯しんやくでは命終必得生めいじゆじゆひつとくじゆと云ふ、本論の修多羅しゆたらかを引く前の文と照

合あすると、以專意念佛之因緣しゆせんいねんぶつしゆいんげん隨願生じゆいんげんじゆじゆ他方佛土たはうぶつちの文が曇鸞どんらん大師だいしの論註ろんちゆの始めの信佛しんぶつ因緣いんげん願生げんじゆ淨土じゆんちゆの文意ぶんいと一致いちじします所より見れば、意味いみとして斯く譯するも敢あて差問さもんないのであります、又所修善根回向しよしゆぜんこんくわうすると云ふも、法藏ほふざう永時えいじ所修の善根を回向くわうし玉ふと訓點くんてんを施せば、吾高祖われたかそ大師だいしが至心回向しんくわうを至心に回向くわうし玉へりと令諸衆生りやうしよしゆじゆ功德成就くどくじゆじゆの令しの字より見込みこで、佛力の然らむる所として訓くんト玉ふ所と、全然一致する事になるから、十八願成就文じゆじゆであることと窺うかがふのであります、此れを窺うかがふに眞宗しんしゆとして見ると然らざるとは、餘程よほど其趣そのおもむきが變かはつて感ぜらるゝと思ふのであります、丁度ちやうど觀無量壽經くわんむりやうじゆを天台てんたいや三論宗さんろんしゆの大家だいがが見られると、

彌陀も淨土も唯心の彌陀已心の淨土と見られるものであるから、已心中の消息を方便の爲に娑婆と佛土と、淨穢を彼此二土に假設したものと解せらるゝが如く、況んや此の起信論の構想が一心は法界の大總相と説明して、一心を以て宇宙法界を結ばれたものなれども、其説明に至ては宇宙を該攝する一心を果位に奪つて圓覺心となして宇宙全體を説明する道と、一心を因位に奪つて衆生心となして宇宙全體を説明する道と、二様に説明の道を開かれたのでありて、其の圓覺心に奪つた時は佛陀を客觀的に説明せねばならぬ故、純然たる他力義が顯はれ、其の衆生心に奪つた時は主觀的已心中に彌陀も淨土も存在

する事を説明せねばならぬ故、純然たる自力義が顯われるので有ります、然るに著者は二様の道を自から本論の上の開かれたるにも關らず、其の説明の所に至つては一心を因位に奪つて、一心二門三大の大乗の上に三細六麤の退化説と、四信五行の進化説とを説明して、主觀的衆生心に一心を奪つて解釋せられたれば、自然の勢彌陀も已心中の彌陀、淨土も已心中の淨土と説明せねばならぬのであります、そこで彌陀も淨土も開發せる衆生心と云ふに至つたのである、然れども元より著者の哲學的構想が主客兩觀、因果何れに奪ふも自由自在なる道を開かれてありますから、一心を果位に奪つて客觀的圓覺心を以て、宇宙全體

を説明する道を不言の裡に許されてあります、然し本論の文字に顯しては、衆生心の一方に力を盡して論せられたるが、圓覺心に奪ふたる一方は理在絶言と申して意味は裏面に於てあり々々と認むる事が出来ずから、起信論に躍動せる救世者の使命と題して躍動の文字を以て顯文に簡んだ次第であります、猶近頃基督教の事を神人混合説であると申しますが、眞宗の彌陀佛も神人混合の難を受けんとする今日にあつては、起信論の哲學的構想の上に築かれたる淨土眞宗なる事を證明するには金科玉條として仰ぐ次第であります。

第五章 大無量壽經の佛説なる確證

由來佛教を研究するものゝ一般が歴史の事を餘り八釜敷云はない風でありました、然し全く歴史の事を云はないかど云ふと相承たとか傳燈たとか申す事は随分八釜敷申して居たのであります、今日の科學的研究法に照して歴史を研究すると云ふ風は無かつたと云つても宜しい、是は獨り佛教ばかりでない、東洋の風がこういふ學問の風であつたのに、宗教信仰の餘り學術的に研究しない、神聖にしてしまつたらしい、所が近頃歴史上の研究が八釜敷なつた結果、大乘佛教は佛説でない小乗佛教が星移り物變る間に發達したものと申します、それと申すも大乘經典の歴史は常識の上から仲々信せられ

ないと言ふは、先づ華嚴經の歴史にしても、法華經の歴史にしても龍樹大士が龍宮界から持ち歸られたものであるとか、又た結集と申して佛の説法を聞かれた方々が寄り合つて、いつの御説法はこうであつたと打ち合はせて貝葉に書きあけたのであります、然るに華嚴經や法華經は鐵圍山に於て普賢、文珠、彌勒、阿難と申す御方々が結集せられたと申し、大日經は釋迦如來の御説法でない、法身毘盧舍那如來が自の眷屬金剛薩埵の爲に自内證の法門を説かれたもので秘密の教であるから其の經を南天竺の鐵塔の中に收めておかれたを、龍樹大士が鐵塔を開いて取り出されたものたとか申して、龍宮にしても鐵圍山

三十一

にしても南天竺の鐵塔にしても、さうも常識では受け取れにくいのである、又た文珠とか普賢とか云ふ人は、さうも歴史上に見る吾人と同一な人とは見にくい、金剛薩埵とか云ひ、釋尊の説法でない毘盧舍那法身の説法たと云ふに至つては愈々聞き取りにくいのであります、そこで人格歴史を貴ぶ今日の科學者には、人格の歴史の範圍を脱して手品師的の歴史であるから、佛滅後に世に顯れた大家が自分の説を神聖視せしめんとする手段に出でたるものである、大乘諸經は佛説に非すと云ふ説が八釜敷なつたものである、それに反して小乗の諸經は歴史と云ひ、其經の内容と云ひ人格的であるから、佛説であ

ると云ふ事が信せらるゝのであります、そこで燕雀何ぞ
 鴻鵠の志を知らんとか大聲俚耳に入らずとか申して、獨
 り今日に始めて大乘非佛説と云ひ出したのでなく、支那
 にも印度にも昔から此の説の行はれたのであります、そ
 れと云ふも教理が廣大であるから凡庸の耳に入らない
 餘り、所謂世間で申す法螺のよふに思はれて人間の心想
 に投トにくいから、あれは眞面目でない佛説でないといふ
 ふに至つたものである、然れども理想の高ひ大人物には
 眞面目な法に見ゆたものと見へて、佛説と自からも信せ
 られた跡を歴史上に於ても往々認むる事が出来来ます、偕
 て私には大乘諸經の佛説であると云ふ御話をする前に、

各位の信念を置くに邪魔になる鐵圍山の事とに付て御
 話を申して置きましたよ、その龍宮とか鐵圍山とか申す處
 が全く無ひと否定する事も出来ない、左様なれば愈ある
 かと云ふに必有と云ふ事も出来ない、無ひと云ふも眞實
 有ると云ふも眞實である、因によりて果を結ぶものであ
 るから、因無量なるが故に果亦無量で、如何なる境遇が顯
 現するかも知れないのでありますから、龍宮も客觀的に
 存在せぬとは申されにくい、獨の碩學否世界の大學者と
 仰がるゝカントの天體論には、天上に散布せる無數の星
 界にも、人間よりは智識及道德の優れたるもの、若くは均
 じきもの若しくは劣等なるもの棲息せずと否定するは

不條理なりと論せられてあります、又地球上に於ける生物學の原理、植物學の原則に基けば、月球の如き寒冷なる所、太陽の如き炎熱なる所には生物の發生する筈はないのに、人類の經驗の結果、生物學植物學の原則を越へて太陽に植物の存するを認むる事が出来、又非常の寒非常の熱に於ては、生物なり動物なりは生活する事が出来ないに、海底日光の岩に障へられて透らざる裡にも生物を認め、百度以上の炎熱に於ては下等動物は生活を持ち能はざるは、赤痢、コレラ、ペスト菌を殺すに蒸氣消毒法によつて實驗するは、世界學者の眞理として唱説するにも拘らず、無量無邊の因果の法則中に於ては、身體と靈とを境遇

によりて如何にでも出来得るものと見ゆ、魚は鰓によりて呼吸するよふに、鳥は翼によりて飛翔するよふに形造らるゝが、炎熱に燃へ上れる瓦斯の中にも生物は存すと云ふ事であり、又佛國のフォントチール氏は「住すべき世界の多きを論ず」と云ふ書を著されて、住居する所が澤山にある事を申しておる、そふして見れば今日の學理上から推して、随分風變りの世界及び其の形狀其の境遇のものが決して之れ無とは否定することが出来ないものであります、既に進化論に於ても物理的の變化と云ひ化學的の變化と云ひ、無限に變化するものでありますから、事狀の結合によりては、その變化を顯す事が千態萬狀に

なる事が出来ず、まして吾人が毎日あるものとして見
 まするから、何物でも疑怪の念を起しませぬなれども、人
 々が人類相互に見る事の外の一つ珍らしき動植物の事
 を話したら、非常に懷疑に思ふでありまして、喩へば人類
 は人類のみを知りて、其他の動物をは何も知らないもの
 であつたなれば、犬と云ふものは手と足とで歩み、後に尾
 と云ふものがあると話したら、随分面白がるたろと思ひ
 ます。文學博士井上圓了師は妖怪學を以て名高い人であ
 ります、世界の人の目には人間の外は何も見えずして私
 一人の目には今見らるゝ丈の事物が見ゆるて而して話を
 したら直に博士になられるは必然である。彼のコロソボ

スが太平洋中に大陸のあるといふ事を主帳した時は、世
 間の人は發狂者と云つたものもあつたのである、又法螺
 吹きと云つたものもあつたのである、然し今日となつては
 そこに智識が達したものが實驗したから、誰れも怪しく
 おもはないよふになつたよふなもので、無際無涯の宇宙
 間に如何様なる所があるかも知れない。然し私はその
 知れない所を龍宮た鐵圍山とは申さない、彼の華嚴經
 や法華經を龍宮より持ち歸つたと云ふ龍宮は、或學者は
 龍宮と云ふは錫蘭島の事た杯と云ふ人もある、此處なれ
 ば經卷もあるたろ、水の中と云ふ事も島であるから云へ
 るたろなと、頻に主張する人もあるが、此れは經說にす

ぎないかと思ふ、又た龍宮に經卷が收められてあつたと云ふは、龍種族と云ふ一族があつて、其の種族の手に大乘經は所持せられてあつたものと云ひ、龍樹が大龍菩薩に連れられて行つたと云ふも、龍種族の人につれられて行つて向ふで經卷をみせて貰つたと云ふも事實に近ひ随分力のある説たと思ひますが、私は龍宮と云ふは一の形容につかた詞で、世界の佛教徒が小乘經は信トもし研究もして世に用ゐられたれども、大乘經は信するものもなく研究するものもなく、自然世間にも顯れないから文字に寫してある御經はあつても、其の教は沈んでしまつたと云ふを、龍宮に藏つたと云つたものと考へます。

そは賢首大師が起信論の註を書いて、其序の中に大乘諸教沈貝葉人不尋と申してあります、此れが龍宮に沈んだ有様なると考へます、華嚴經なり法華經なりを龍樹が龍宮から持ちかへつて世に宣布したと云ふも、唯た貝葉に寫した御經があるのみで人の尋ねないのを、此を研究して世に發表せし効を形容して龍宮より持ち歸つたと云つたものなると考へるのであります。それに能く類似した話は、大日經を龍樹が南天竺の鐵塔を開ひて世に弘めたりと云ふを、法爾論者と隨緣論者とあつて、隨緣論者は南天竺の實際の鐵塔を開ひて大日經を得て世に弘めたのであると云ひ、法爾論者は門かたし文の門と云ふ様に、

大日經は秘密の經で仲々六ヶ敷故、龍樹が百難を排して此を研究し、經中に含める蓋世の眞理の光明を以て、世を照し世に宣布したるを鐵塔を開ひて、大日經を得たと形容したものと申しますが、今も此れと勘へ合せは思半に過ぎんたると考へます、斯く御話を致しますれば、次に龍樹大士が小乗佛教全盛の時代に自分で作つて、佛説た龍宮から持て歸へつたなど、申して四周が許しますか能く考へて御覽なさひ、そこで私は龍樹菩薩の著にかゝる論文に引證せる御經文は、慥かに龍樹菩薩の當時に世に存在してあつたから、世間の學者も議論の立證として許したに相違ない、又引證と云ふも相方共に許すもので

なくては立證にならないのでありますから、龍樹の著述中に引證せる大乘の諸經は龍樹以前のものにして、龍樹の自作でないと云ふ事を歴史が證明して居るように認めます、所が龍樹大士は佛滅後九百年の出生であります、本論の著者は佛滅後四百年の出生でありますから、龍樹より前立つ事五百年前の事であり、そふして見ますれば龍樹の當時立證せる經にして五百年前の馬鳴も立證してあれば、龍樹の自作でない事は明瞭であると思つて、然し馬鳴の自作ではない事、疑問があるかも知らぬ、馬鳴の人物と云ひ馬鳴の經歷から推しても、婆羅門より小乗に入り小乗より大乘に入りたる御方で、

然かも全印度は小乗佛教のみ全盛を究めたる折なれば
 其の敵中に處して大乘佛教を主帳と玉ふのであります
 から、口論ばかりでなく論文まで草して、自信の議論を鼓
 吹せらるゝ爲に出来た起信論であるから、其の立證とす
 る修多羅は勢力のある小乗教徒も許す處の修多羅でな
 くてはためたと考へらるゝのであります。これを思へば
 馬鳴の自作でもないと言ふ事は明瞭にあるたると考へ
 ます。斯様に申すと馬鳴已前に於けるものゝ手によつて
 作られたるものかも知れないと云ふものもあるかも知
 れないが、斯る高層なる哲學を含有せる經卷は到底小學
 者では案出する事は出来ない、實に非常な大哲人大學者

でなくては出来なひ、仕事であります。斯様な偉人があ
 らば歴史上に其名の端位は出てありそふなものである
 のに出で居らないのは却て歴史が佛説を證明しておる
 のたと信トます。又馬鳴以前に大乘教典の世に存せし證
 ありやと云ふに、緬甸佛傳によるに佛滅後百年頃にあり
 し、達磨阿育王の時代に第三の結集を行ひ、傳道師を各地
 に派遣せられたるに、金支國(馬來半島)に鬱多羅を遣し、其
 の携帶せし經卷の内に大乘梵網經の記載されてありし
 ものは大乘經の世に存在してあつた證據であります。猶
 大乘教を信せし者もありしと見ゆて、大智度論の中に大
 乘を信するものは、大衆部小乗を信するものは上坐部で

あると申してあります。是の大衆部は窟外の結集であり、まゝて自由派の人が多かつたと見えて、改進主義の人達の結集で、上坐部は窟内の結集でありまして、頑固派の人、保守主義の人達の結集でありますから、丁度基督教で申せば、上坐部は舊教の如く、仲々嚴密で、大衆部は新教の如く、餘程寛容な風があつたものと見えて、大乘をも信じたものと見えます。そこで、玄奘三藏の西域記にも、大乘の諸經は同所に於て結集すと申してあつて、大衆部と同じく窟外で結集したものと見えます。特に段々御話申した如く、龍樹の引證した經は、其當時の人も佛説と許したに相違なしとすれば、大無量壽經は近く十住毘婆娑論の易

行品にも引證してあり、大論の中にも阿彌陀經として經名を引てあります。是れも大無量壽經の事かも知れませぬ。又龍樹に先立つ五百年前の馬鳴も、成就文を修多羅説として立證せしを見れば、他經は兎も角、大無量壽經は佛説に相違ないのであります。

第六章 一論の組織

偕て一論の組織は一心二門三大二覺二不覺三細六麤四信五行を以て結構となつておりますが、其の一心は宇宙全體を綜合する目にして、一心を以て宇宙を提ぐるので、一心は法界の大總相法門の體なりと申してあります。其

の一心を表面より見れば、凡聖佛凡山河草木日月星辰の森羅萬象歷然として差別してあります。是れを生滅門と名けます。其の一心を裏面より見れば一定不變の實體若くは理體と云ふべき萬有に渡つて變せず動せず然も能く變ト能く動ずる事を得る、一大眞理を眞如門と名くるのであります。此の表裏兩面となつておる眞如と生滅の二門は、一心の兩面にして寸時も離るゝ事が出來ないのみならず、此の一心には體相用の三大の義を備へて居ります。其の一心の體は眞如門でありまして、其の一心の相は體の眞如門が進んで佛となるも、退ひて凡夫となるも、其の佛の相凡夫の相が其儘一心の相にして、一心の體

なる眞如の相であります。又一心の用は一心の體なる眞如が、佛と云ふ相を現するも凡夫と云ふ相を現するも一心固有の勢力作用に支配されるのであるから、是の力用を用と申すのであります。如此一心の體に備ふるの力用によりて、佛なり凡夫なりの相を現するが一心三大の義理であります。其の力用に支配されて進んで佛界に至るを還滅門と申し、退ひて迷界に墮落するを流轉門と申すのであります。其の佛界に入るを還滅門と申すは、元來一心の體は眞如でありまして、眞は眞實如は如常と申して、極て圓滿なもの極て誠實なもの極て廣大なもの極て清淨なもの、依估なく偏頗なく平等を而かも公平なもの

でありまして、宇宙の森羅萬象を腹に容れ心に懐ひて意
とせざる廣大な慈悲心をもつて居るのが眞如でありま
す、此の眞如より流轉して三細六麤の波瀾を起し、遂に其
の止まる所を知らないのが我々共であります、然るに一
度此の胸中の波瀾を静め去つて眞の本源に還歸すれば
眞如固有の本徳は皆我々の徳となるものであります、曰
く亂想の水には眞如の月浮はずと泉水の水は能く影を
寫すものであれども波あれば花も鮮ならず草も鮮なら
ず、草木花奔皆な其の影亂れて見るに由なく、美と云ふ所
は一つも無ひのであります、なれども一度水静り波滅し
て本の湛然寂靜なる本源に還歸せば、天の星辰を始とし

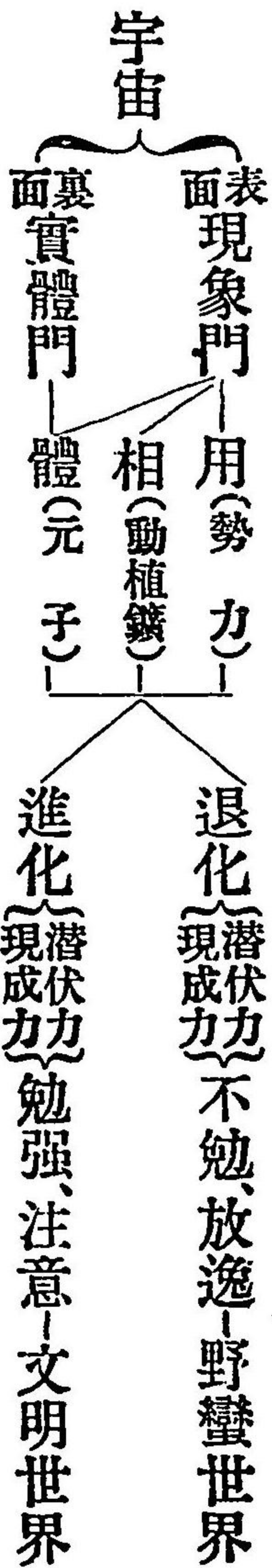
實の如く、宇宙の森羅炳然として其の影を宿すが如く、一
心水面に起りつゝある波さへ滅して其の本源に還歸し
たなれば眞如性海の實景を見る事が出来ず、此處を進
化の極大涅槃の妙境とも、性海々印三昧の妙處とも申す
のであります、如此進化するも又波瀾を起し流轉して退
化するも因縁なきに非ず、其の流轉して退化する原因
には根本不覺枝末不覺を示して三細六麤と綿密に論ぜ
られ、又其の還滅して進化する原因には本覺始覺を示し
て、四信五行と詳細に論せられたが、此の起信論一部の組
織であります、今此れを圖示して御目にかけます。

第一圖



右の圖を御覽になれば一論の結構は容易に解する事が出来るたると考へます、今此れを今日の諸科學の上で圖を作つて御話を申しまじよ

第二圖



第二圖の説明を致します、一番上段の宇宙は第一圖の

一心に相當し、二段の現象門は宇宙の表面でありまして、實體門は宇宙の裏面でありまして、是が一心の表裏兩面なる生滅門と眞如門と相當するのであります、又一心の三大に相當する宇宙の體相用の三大を御話申します、宇宙の現象たる有機無機生物無生物動物植物礦物日月星辰山紫水明花紅柳緑の相即ち姿を相大と申すので、此の相は要するに宇宙の相であります、抑も宇宙と云ふものは萬有を該攝して宇宙と申すのでありますから、一事一物として宇宙の相大でないものはありませぬ、是れを以て知る一心も法界萬有を總該するものでありますから、宇宙のもの一相として一心の相大でないものはない

と申す事がわかります、そこで相あれば體ありて、動物でも植物でも礦物でも、其の相のある限は其の體が無ければなりませぬ、所が其の體に就て物理學者は分子たと申し、化學者は元素たと申します、今私は物理的に其の體を求むるでもなければ、化學的に求むるのでもない、吾人が日夜に認めつゝある、總て宇宙の現象は無より有を生じたるか、有より無となるかと古代の哲學者もこれには困つたものと見ゆるまじく滑稽にも無が集つて有となつたのたと云ふに、芥子粒一粒を落すに音はなひ、その音のせない、芥子粒を萬粒も億粒も一時に落せば音がするそれが無を澤山集めると音の無ひものでも音が有るで

はなきやと云つたそふであります。若し無が有になれば○に○を加へたら何か數が出来ねばならぬ、然るに○を何程加へても一つの數も出来ない、そこで有たと申す人も出来て来た所が、有ならば其の相は如何様なものか、見る事が出来るか取る事が出来るかと云ふに、見る事も取る事も出来ない、然れば○が零でないとして、古來の學者も分子を主張する事に困難したものと見ゆる。此の物理的分子論の外に化學者は其の體元素が萬有を形造くるものであると申しますが、其の元素も七十餘も有りませから、かく區割の出来る限りは、眞の元素の元子と云ふ事が出来ないとして、近頃の學者の中には七十有餘の

元素は唯一水素の變形したるもので、其の水素が幾度も
 々々々變化したるが、宇宙の現象であるが、宇宙の本體は
 唯一にして宇宙全體に満ち満てる水素であるといふに
 至つたのであります。其の元素の元子たる宇宙の體大と
 云はれる水素は、不増不減不生不滅のもので、其の廣き事
 極りなく涯なしでありまして、口でも其の實際を云ひ顯
 す事が出來ない、筆にも充分書き顯す事が出來ない靈妙
 不可思議な一體であります。是れを名けて水素たと申し
 ますが、其れは符號のよなもので、實に叶つた名とは申
 されぬ。其の當體を命名したら眞實如常の目を以て眞
 如とは云ふたものと大差はないたると考へます。此を名

けて隨分眞如と名くる事の出來得る所の絶待靈妙不可
 思議なる一體が宇宙の體大となつて、宇宙の萬象の相大
 を造り出すは、其の本體固有の用大即ち勢力作用の然ら
 しむる所であります。其の勢力作用にも物質的勢力と心
 性的作用とがあります。今は重に心性作用を主眼とす
 るのであります。此が宗教の宗教たる所であります。そこ
 で靈妙不可思議絶待の本體を特に名けて心と申しまし
 た、併しながら單にコ、ロといはるゝ物とは其體と相と
 の別ありて、コ、ロは今云ふ所の絶待の一心の上に於け
 る一現象すなはち眞如の相大の一部分たといふことを
 御承知おきありたし、先つ一心の三大宇宙の三大の御話

は一應御了解になりたすとすれば、則ち吾人が進んでは佛界に入り、隨落しては凡夫となるも、此の三大を離れては、どうする事も出来ませぬ、進むも退くも此の三大の義に乗らざるから大乘と申すのであります。此の三大の義に乗るに悪用と善用とがありまして、悪用する時は退化し、善用する時は進化するものであります。その善用にも悪用にも本然の潜伏力と經驗の現成力とがあるののであります。今之れを善惡に分けて圖に書きまじよ

(イ) 惡
根本不覺(本然の潜伏力)
枝末不覺(經驗の現成力)

(ロ) 善
本覺(本然の潜伏力)
始覺(經驗の現成力)

此の(イ)の圖に示しまじた根本不覺より枝末不覺を生じて退化するのは湛然寂靜なる水が風に接して波動を生ずべき性を備へて居る其の性を根本不覺と申すのであります。現在波動を起しつゝあるものを枝末不覺と申すのであります。其の靜なる水より微動を起し、山の如き怒濤となるには三細六麤と細より麤と次第に動き、段々激して大船巨艦をも覆すようになるのであります。此れが退化の状態、流轉の相狀であります。此に反して怒濤山作す如き迷海も其の水の性を云へば因縁によりて起りたるものであります。

ますから、又因縁によつて其の本源に還歸する事が出来る、其の怒濤の中に備へたる湛然寂靜なる性能是れを本覺と申し、其の波亂を靜める事に勉むるが始覺でありま
す、其の波亂を靜める方法を四信五行と詳細に論ぜられ
たので、其の四信とは三寶に對する信念と、佛寶の中の法
身眞如に對する信念と、都合三寶の佛と法と僧との三と
法身とで、四に對する四信、五行と申しますは施戒(慈善)戒
行(行爲)忍行(忍耐)進行(勉強)止觀行とせ五行になります五
番目の止觀行は止は禪定の事で意の靜まる事、觀は觀察
で智惠の事でありますから、四信五行は衆生心の水面散
亂操動と波立ちつゝあるゆへに、此の波を靜めるのか四

信なり五行なりであります、此の四信五行の修養の出來
得ないものゝ爲に開かれたが、私が特に御話せんとする
一大論點であります、然るに一論の順序を追ふて見ます
ると、法界の大總相たる一心を衆生心に奪つて論トてあ
りますから、信心即攝護の如來の勝方便も衆生心の外に
は一物も存在せぬ事になつて、彌陀も淨土も唯心の彌陀
已心の淨土となつて乾燥無味に終らねばならぬなれど
も、本論の一心は獨り衆生心に奪ふのみに限られず、又た
果位の圓覺心に奪つて客觀に一心を説明する時は佛心
者大慈悲是なりと云はるゝ沸くが如く燃ゆるが如き御
佛の慈悲の外、宇宙何物をも存在せぬ事となり、吾人も鳥

の空中を飛翔する如く、魚の水中を游泳する如く、あたゝかき大心海中に生涯を送る味を見出す事になるのであります。

第七章 一心の解釋

一論は一心の活動寫眞と申しまじうか、一論ばかりでない、宇宙は一心の活きたるパノラマと申しても宜敷と思ひます、賢首大師も義記の開卷第一に一心を真心寥廓として言象を筌蹄に絶し、冲莫希夷にして境智を能所に亡すと解して居りますか、一心は時間的に求めても在らざる時なく、空間的に求めても在らざる處なく、時空二間を

透して常に存在するもので、又其の體格を云へば礙ゆる處なく、十方に擴がつて無量光の徳を備へ、其年齢を云へば三世を透して無量壽の徳を備へておるのであります、又一心の智慧は威あり、一心の慈悲は仁ありであります、智慧あつて慈悲なきに非ず、慈悲あつて智慧の無きにあらずで、威在つて猛からずと云ふ性格を備へてをりますから、宇宙を知る事我體を知る如く三世十方を知悉し慈悲も三世十方に限りなき宇宙を體内に藏めて自若としてをるのです、否慈悲心の中に無限の生類を懷き抱へておるのでなく、一心は全宇宙を體としてをるのでありますから、山も川も人も鬼も凡夫も佛陀も巾着も摺木も

一心でないものは一つもないのです。

西行も牛も娼妓も何もかも

土のばけたる稻荷街道

誠に全宇宙の萬象は皆な一心のお化でありませぬ、斯の如く一心は萬象を透して堅に往古來今横に上下四方に充滿してをります、今迄の一心の話を約し喩を以て御話申せは唯今の佛教大學に吉兵衛といふ八十に近ひ忠僕がおりますが、忠僕と申すも眞の忠僕で四十年も五十年も學校に仕へてをりますので、職員は新陳代謝と變つても學校の制度は幾度變つても校長総理は變つても、變らなものは忠僕の吉兵衛でありますが頭は決して床屋散髮

所の手にかけないから、一見頭を見ても吉兵衛と云ふ事が知れるのであります、其の歩みぶりも十年一日の如く垣の下を透して足の歩みぶりを見ても吉兵衛だと云ふ事を皆な知つてをります、吉兵衛と云ふ名は彼の全身に通トておるので頭丈が吉兵衛でもなく足丈が吉兵衛と云ふ名でもありませぬ、名は全身に行渡つてをる名であります、垣の下をすかして歩みぶりを見た丈けで吉兵衛だと云ひ、全身は屏に隠れて頭の髮丈を見て吉兵衛だと頭のみ足のみを以て全身に行き渡れる名を奪ふようなもので、一心は全宇宙に行き渡つて何れの處も一心でない處はないが、此の宇宙を一人の人間として見ると

人間の頭は最上位と位してをり、足は最下位に位するが如く、宇宙の最上位に位する佛は頭でありまして、最下位に位する凡夫は足のようなものでありますが、ところが頭だけ見ても足だけ見ても全身に通ずる吉兵衛の名を奪ふようなもので、宇宙の頭なる佛丈けを抑へても宇宙の足なる凡夫丈けを抑へても全體に通ずる一心を奪ふ事が出来る一心が本論の一心であります、又近く例を取れば、月は唯一なるのに、甲の人も我が眼中の月と月の全體を我眼中のものと見、乙の人も我が眼中の月と月の全體を我眼中のものと見るも、何れが眞實で何れが不眞實と云ふ事はなくして何れも眞實である如く、佛も我が一

心我が宇宙と云ひ、凡夫も我が一心我が宇宙と云ふ事が出来るのであります。處が此の起信論は佛と凡夫とのみならず、其他何れに奪つても毫も差問なき事に理論を組織し上げて置いて、而して本論の文章の上では其の一面の凡夫に奪つて、一心は衆生心なりとして説明せられたのであります。それには別に仔細のあることなれども、理論の組織が御了解にさへなりまじたならば、今は別に文章の上の説明を致す必要もありません。夫れは右も左も理論の組織上から推して行けば、文章の上にも其の半面には絶待の本體をば全く佛陀に奪ひ取つて一心は圓覺心なり大慈悲心なりとして説明する道を開きをか

れたる妙趣が、微に幽香を發しつゝ躍動して、そこで今は其の幽香を發しつゝ躍動して而も隠れてをる妙趣をば、微力及ばずながら開顯して見たいものたと思ひまして、特に此題を簡んたのであります。さて漸々妙處に近き佳境に近ずいてまいりましたら、其の佳境に入る前論として、佛陀の圓覺心に奪へば、如何に宇宙を説明するかを論せんとするに就きまして、今親しく我が國體に例を取つて御話いたしよ、抑大日本帝國をば甲の人も我國と云ひます、又乙の人も我國と云ひ、陛下も亦朕が國との玉ひ、國民も我國と申しまして、而も何れもみなく眞實でありますよ。そこで國民の側から我國と云ふて國家全體

を奪つた時は、恐れ多くも陛下を始め奉り、此わたくし一人の爲めに大御心を勞はらせ玉ひ、大臣も大將も中央政府も地方廳も四千萬同胞も、皆な我一人の爲に心痛してをるのであるから、我れが若く無かつたなれば何も必要は有りませぬ筈だが、我れがあるから何もかも必要があるので、我の内に國家の用具は皆な必要となつて存在するのである、誠に國家の總ては我に安寧の日を送らむる爲めにして、我の中の國家であるから、何卒各自に此の國家の恩を感謝せねばなりません、もと國家を忘却して我已外に國家なごと思ふならば、それこそは世の不忠者であるから、我が爲めと云ふ中の國家であると云ふ考を

すてゝはなりませぬ、此の議論が成立すると同時に、我は陛下の中の我なりと云ふ議論も必ず成立いたします。然れば我國の國體は國家擧げて永久の昔より天壤と究りなく陛下の國家でありますから、農工商を始めとし世に所有もの一塵一芥として陛下の物ならざるはなしであります。かくのことく陛下の外には一物もなしといふ斷案を下し得らるゝ、否下さねばならぬのが大日本帝國の國體であります。此の私も私ではない陛下のものであります。私は陛下の御用品でありますから、自分で自分の事を御寶と申すのであります。又平田翁は自分を御民平田と書かれたそうでありますが、實に陛下の御民と申す

意味であります。今上陛下の軍隊の勅語の中に四千萬同胞に對しては、朕が股肱と頼むと勅あらせられてあるからは、私共は陛下の御體も同様で手なり足なりであります。斯く君臣何れの側よりも共に此議論は成立するので共に眞理であります。併しながら國體の當然はと云へば申すも愚か畏くも一天萬乘の陛下の外には一物なし、我も陛下の中の我なりと云ふにあるのた、然し起信論は默然の裡には雙方を許して、説明の上には一心は衆生心なり、陛下も國家も我が爲、我の中の者として論じたのであります。ところが私は馬鳴大士が默許せる一心を圓覺心に奪つた方面で、日本國體の當然なる陛下の中の吾人な

り云ふ事實問題を開き出すのでありますから、夫れで以て今佛陀中の我……佛心中の我……慈悲中の我……と云ふ妙趣が起信論の裏面に躍動しつゝあることを認められ、私の眼中には佛の御心の外には無我にて候と云ふ味が映ト來りて佛陀の攝取心光の外には全く我てふ事なくと云ふ信念が沸き出づるのであります。然し攝取心光の裡の我は光明界裡に造次顛沛し起居動靜をなすつゝ、縱令我は去つて宇宙以外に飛び出せんとするも出づる事が出來ず宇宙以外に飛び出でざる限りは佛心中を飛び出づる事が出來ないのであります。誠に幸福の日を送くる事を得るは佛心の遍滿せるを認め九身であ

ります。之れで一心の解釋が大略すみまゝに九から、これから歩を進めて染相凡夫の方面に奪ひたる一心と淨相佛陀の方面に奪ひたる一心を御話致しましよ。

第八章 染相凡夫の方面に奪ひたる一心

此の方面は前の喩に例を求め來れば、垣の下より全身は見ゆされども、足の歩みおりのみを見て、彼れは忠僕吉兵衛なりと全身に通ずる名を奪ふ如く、又國民の一人が國家は私の國家なりと全體に通ずる國家を我の中の物とする如く、一心は宇宙全體に通ずるものなれども、一心は衆生心なりと一方に奪ひて宇宙を説明するが一論であ

りまして、是に於て自然の勢四箇の定理を見出す事が出来ず。

第一 衆生心の外宇宙一物の存するを、彌陀も宇宙の隨一なり故に彌陀も衆生心中の彌陀なり。

第二 宇宙は開發せし衆生心なり、彌陀は宇宙の隨一なり、故に彌陀は開發せし衆生心なり。

第三 第一第二の定理によるに唯心の彌陀、己心の淨土は自然の勢なり。

第四 第一第二第三の定理に基き衆生心を開發せしめて唯心の彌陀、己心の淨土を現實にせずんばあるべからず。

そこで衆生心を開發して唯心の彌陀、己心の淨土を現實にするに就ては、四信五行が必要であります。此の四信を起し五行を修すると云ふは、私共に取ては木に縁つて魚を求むるよりまた難ひのであります。今其の困難を御話しましよ。然し是の一心は相對の衆生心を以て絶對の一心を奪つたのであります。

第一の困難は、既に唯心の彌陀、己心の淨土と申しますから、彌陀も淨土も性能として衆生心中に備へてをるので、彌陀は汝の手の内にあり、汝の足の下にあり、然れども怠らず、勉めなければ、心の内に具する所の彌陀も淨土も開顯する事が出来ず。丁度貧乏人に向つて富は汝の手の

内にあり、富は汝の足の下にあり、勉めて怠らなければ大富となる事が出来ると申すよふなもので、實際に於ては容易ならざる事であるから世の諺にも「算用合ふて錢足らず」稼に追ひ付く早貧乏」と申しますが、能く實際を穿たものであります、理論は完全でも又手實踐躬行となれば宛然鐵槌の川流にて一向頭が上りませぬ、到底浮ぶためとはありませぬ、世界滔々皆此輩が多いが、佛教の中にも此輩が多い、是れが第一の困難であります。

第二の困難は、彌陀は一心の全體、即ち宇宙を掌中に握つたものであります、此の宇宙を掌中に握り胸中に圓め込むといふ事が仲々困難であります、そは一心なり宇宙

なりは三世に渡りて限りなく、十方に渡つて邊のないものでありますから、之れを握り圓めたる彌陀を自心中より開發し現實にするは要するに有限を以て無限を追ふものでありますから、三世限りなき故に三祇百大劫を要し、十方涯りなき故に十萬億佛土否無際無涯の宇宙を跋渉して探險するよふなものですから、丁度無限の數を數へるよふなもので盡くる理由はないのであります、それは數と云ふものは其の多其の大が無限多無限大であるから、無量の人無量の時を費すも數に限りなき故、未だ數へない數が永久無限であります、此の事を華嚴經の中に飛行自在の菩薩があつて東より西に一切百劫無量劫の

間飛行せられたるも東に遠かつて西に近く事なると申してありますが、是東も西も無限であるからであります。莊子にも無限を追ふの愚を笑つて鯤と鵬との話が出てをります。獨り佛教ばかりでなく、英國の碩儒スペンサーも、吾人經驗の智識は可知界に限つて不可知界に及ばざれば、リヤリナーは永久リヤリナーだと申し、ゼボンもチンダルも皆な如何に多くの智識を有したりとするも、無限に對しては無限分の一であるとし申しました。が、今後幾億萬年の後になつても、世は知れない事を以て充滿してあるは必然でありますから、吾人の有限を以て無限の佛を追ふと云ふは、雲にかけ梯霞に千鳥及ばぬ事ではあり

ませぬか、是が第二の困難であります。そこで更に一番別に斯る困難の關門なき徑路を發見しなければならぬ必要が起るです。ところが其徑路が已に業に開通せられてあるを、それは外ではありませぬ。淨土眞宗の極意即淨相佛陀の方面に奪ひたる一心であります。

第九章 淨相佛陀の方面に奪ひたる一心

私が躍動せる救世者の使命と題しましたるは、淨相佛陀の方面に奪つた一心のことであり、此の方面の説明は前の譬喩に例を求め、全身は屏に隠れて頭の毛の風

ばかりを見ておれば忠僕吉兵衛たと全身に通ずる名を奪ふ如く、國家は陛下の國家なり、陛下の外には一拳土の土もない、四千萬の同胞も陛下の御寶として御民として陛下の中に存するが如く、宇宙全體に透れる一心を佛陀の圓覺心の方面に奪つた味を御話申すので、此の一心を淨相佛陀の方面に奪へば、六箇の定理を生み出す事が出來ます。

第一 彌陀の外には宇宙一物も存するなし

故に吾人も彌陀心中の吾人なり。

第二 宇宙は開發せし彌陀なり

吾人は宇宙の隨一なり

故に吾人は彌陀中の者なり。

第三 第一第二の原則は十劫の昔彌陀の正覺と同時に成立せしなり。

有限の十劫は無限の久遠に即する故に、久遠の昔より吾人は彌陀中のものとして成就せられしものなり。

第四 第一第二第三の定理によつて、吾人は彌陀正覺

の中のものなりと云ふ事を云ひ得らるゝなり。

第五 彌陀の正覺は生佛不二なりとすること、唯正覺

彌陀の方面に成就せしと云ふ事を云ひ得らるゝなり。

〇第九章 淨相佛陀の方面に著したる一心

第六 彌陀正覺の果體は機法一體にして法中に機の願行を成就せられしと云ふ事を云ひ得らるゝなり。

斯くの如き確固不拔なる定理が活動して教となり法となりて、而して吾人の心靈上に金剛堅固なる信念が印現するのであります。丁度我國體が陛下の外一物として存するなれと云へる原則の上に築かれてあるから、私共まを陛下の御民御寶として御用品に數へられてあるのみならず、軍人に對する聖勅によれば、朕が肱股と仰せられてあるから、畏れ多き事ながら私共の體が陛下の御手なり、御足なり、陛下の肉なり、血なり、陛下の御體も同様であ

りますから、廣義に云へば陛下の外に一物もないから、皆を陛下と云へるのであります。そこで私共の體は私共の體でありながら私共のものではない、曇鸞大師は論註に如孝子之歸父母、如忠臣之歸君后、動靜非已、出沒必由と申されたが、國體上から申しても陛下の前には全く無我にて候であります。然し陛下の中の私と云ふ事はあります。そこで國體の上では陛下以外に孤立する私と云ふ事は、啻に非道の最も甚むき者たるのみならず、そもく又孤立の私と云ふ事は、仲々困難な事でありませぬか。蓋し我が國の歴史上に考へて見ましても、維新以前の大名小名はみな陛下以外に孤立的生活をなして居りましたが、牛に

角の必要ある如く、鶏の蹶爪の必要ある如く、自から非常の爲めに防禦器を備へなければならぬ、其の防禦器と云ふ各藩に於ける士族を自から養ふて來たが維新業成り幕府は文武の大權を陛下に奉還し陛下の御身躬から文武の權を秉らせ玉ひて、一の聖勅を下し賜へるを敬承し奉つると同時に、大名小名は自衛の士卒を解きて大ひに安んずることが出來たのであります。誠に永々國體に悖り自から苦んで孤立して自衛の備へをこしてをりまゝたのが、天皇代々の聖意陛下代々の本願は維新の曉天に成就し賜ひ親政の聖勅となつたのでありますから、此の陛下の聖勅に信順すると同時に、陛下の聖勅の上に陛下

の大御心の上に安眠する事を得るようになったのであります。實に陛下は東都の皇城にあらせらるゝと雖も、陛下の大御心は東千島群島より西台灣縣に至る迄充たさせ玉ひて、陛下の大御心は百官百僚となり、警察署となり、裁判所となり、大中小學となつて私共を護り導き玉へる故に破るゝが如き小屋に安眠する事が出來る、是の破るゝが如き小屋は恃むに足らざるも、大御心に安トて眠る事が出來るのであります。既に大御心の存するを認めたらば、大に安んずる事が出來、大に安んずる事が出來たるは、偏に皇恩なりと陛下に對して感謝的報恩的忠義心が起るのであります。是れが陛下の大御心の中の吾々の

行爲であるが、此の誠忠の念は、陛下の聖勅に信順すると同時に湧き来るのでありまゝ、今一心を淨相佛陀の方面に奪ひたる一面は此れと全く同一でありまゝして私共は開國已來、否十劫成道已來、佛陀攝取光中のものとして成就せられたるも、皇城否淨土は西方にありて陛下否彌陀は淨土に在ますと雖も、御心は廣く十方に充ちて我を御心の内に藏め護らせ玉へども、我は彌陀以外の我たと思ひ、今日まで自衛を備へ、否な自衛をも得備へずして迷界の浪人となり、三界の旅路に流浪し、遇々自衛に心付けども、雜行雜修の武士共にて軍事た外交た、否發心修行た廢惡修善たと云へば、如何とも成し難く、可したまへ、涅槃

城下に捷鬩を揚げたいとは思ふても、發心の出陣すらも成し兼ねて、久遠劫來今日までも、いよく迷悟昇沈の開戦となり、臨終刹那の宣戦と來ては何ほう度胸を据ゑて居つても前途到底勝算絶無のなさけなさには、如何に謀計を凝らしても中々安んずる事は出來ませぬ、何と各位悲ひ事ではありませぬか、然るに本師法王の大元帥なる彌陀は慈悲の文を左手に、智惠の武を右手に持たせ玉ひて、心は盡十方無尋光なり、無邊光なり、十方法界に満たさせ賜ひ、十二師團六鎮守府、否十二の光明六字の名號の設備に五劫と永劫の時間を費して、私共を護らせ玉ふに何れの時、何れの處か大安慰が出來ないといふことがあ

りますものか、何れの時にも何れの處にも佛の保護の御心の存せない事はありませぬから、我は佛の御心の中に棲もふ我で、彌陀中の我れでありまして、佛力自然に大安慰にならねばならぬことになりて参りました、然し維新業成つて陛下の聖勅は下させ賜ひても、其の聖意を信トない大小名もありましたから、維新の業成つてからも暫くは朝敵があつて安せなかつたものもあつた如く、聖勅を聞き、聖意に信順すると云ふ事が非常に大切であり、ま、す、今も十劫成道の時より、皇城否淨土に於て今現在説法と勅命は續けられてあり、佛の御心は十方に満ち、佛心中に居ながら彌陀は西方にあり、私は茲にあり、彌陀は彌陀

我は我と云ふ彌陀以外の孤立的藩伐生活をなして、大御心に安せなかつたものが、勅命を聞き、佛心に安じて、彌陀の外には無我にて候と、全く私なると云ふに至つたのが、信念上に一大維新の革命が出来た時であります、又私の考へまするに、彌陀は前に御話申した六箇定理の成立者であります、その六箇の定理の報告者は諸佛であります、故に私共は此のこぼるゝが如き報告、溢るゝが如き報告を聞ひて安んずるより用事はないのであります、その大安慰を得たる時に、佛陀以外に吾人ありと思ふた情は自然に消滅して全く私と云ふ物はありながら無に歸して、佛陀以外の我でなく、佛陀心中の吾人、大心海中の吾人

光明界裡の吾人、國中の人天、南無阿彌陀佛の主になつたのであります、又位置を換へて佛陀の御眼より見れば、十劫成道の時より宇宙は能於掌中持一切世界と彌陀の手に握られて、自由にせられてあるのであります、まして佛陀の體は正覺を以て體とし、正覺は衆生往生を以て體といたしますから、言を換ゆれば彌陀の體の肉なり、骨なり、血なり、髓なりは吾人でありて、彌陀の正覺の體は吾人によりて組織せられてあるので、そこで彌陀の勅命は、凡夫(宇宙の隨一)は彌陀正覺の時、已に彌陀の肉となり血となり體となつて、ある事を報告せらるゝのであります、然るにも、其の報告を聞き、聖意に安んぜなければ、佛心

中にありながら、佛心以外に我と云へる情を構へて顛倒虚偽の生活を送らねばならぬ、丁度日清戦争の當時、台湾の人民は講和談判の終結を告ぐると同時に、陛下は眞の日本人民として均しく仁政を行はせ玉ひて護らせらるゝも、台湾の人民は陛下の聖勅を聞かず聖意を知らないから、仁政の行き渡れる大御心の中に居ながら、我は支那人である、台湾人である、と云ふ固執があつて日本は東に台湾は西に、陛下は日本の東京に、我は支那の台湾にあると云ふ心が止まなかつた、然し台湾の人民にも稀れには此事を知りて大御心に安んじて正業を営みてをるものもありました、それは陛下の聖勅を聞き陛下の聖意を信知

したからであります。そこで如何に佛陀の御心の中に居りまして、其佛陀の御心を聞かすして疑ふものは生死の迷界の浪人となり、聖勅を聞ひて疑なく信受するものは攝取光中の風月を樂む事が出来るのであります。法然上人この趣を詠トて「月かけの至らぬ里はなけれども眺むる人の心にぞすむ」かゝる信念大安慰を得らるゝと云ふも、佛陀が正覺を成ト玉ひし時、吾人を彌陀身中のものとして成就せられたからであります。故に此の信念には、吾人は彌陀身中の物なりと云ふ報告に接して吾人は彌陀身中の物なりと直覺するのであります。蓮如上人も此の信念の境に入らせられて、身も心も南無阿彌陀佛、襟を

撫ても南無阿彌陀佛、疊をたゝきても南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛に圓めらるゝと申されてあります。此の消息は獨り蓮如上人ばかりではなく、私共も報告を聞きて佛意に安んずると同時に此の佳境に入る事が出来るのであります。彼の深草の元政上人は、月に己を忘れ月中の人となり、動靜出沒月に魂を奪はれ、月の外に元政なきの興に達して詠せられた歌に

月や我我は月かどわかぬ間に

心は空にすめる霄の月

また一休和尚か夏の日に高野の峯に登り、木堂の中の經机に大般若の積んであるを見て、こはよき床机かなと赤

裸體になつて經机の上に寝られたれば、寺僧出で來り大
 槃若の上に寝て居るは誰かと叱つたら一休自若として、
 大般若が大般若の上に寝るに何の差間があるかと答へら
 れたと云ふ話があるが茲に至つて其の妙境に達したと
 云ふものでありまじよ、ところが彌陀本願の名號と其の
 覺體とは名體不二と申して、無上圓滿の極果の位置にな
 れば、其名にも亦覺體を徹底して其徳を具備されてをり
 ますから、そこで今も大般若の上にあるが如く、吾人の心
 も名號を聞信せしとき之れと一體になるので、名號と一
 體になるは彌陀と一體になるのであります、其の彌陀が
 光明無量壽命無量でありますから、名號に同化せると同

時に彌陀の徳は我が徳となるのであります、また名號は
 名體不二の名號にて、實相法でありますから、宇宙全體に
 行き渡れる一心の全體を任持してをります、私共が名
 號と一致すると同時に、一葉落ちて天下の秋一花開ひて
 天下の春一滴以て大海の潮を知り得らるゝ如く、佛陀の
 報告を聞く時その場に即得往生の益を得るのであります
 す、其の即得往生は今此の起信論の上に引證せる、修多羅
 の十八願成就文の即得往生であります、聞其名號信心
 歡喜の一念に即の意義が時を隔てず場を隔てずであり
 ますから、時を隔てずと云ふ意義に於ては、三祇百大劫の
 永久の時間を前念命終後念即生と一念に頓悟するから

大無量壽經には一念之項無央數劫と申してあります。又
 場を隔てすと云ふ意義に於ては、十萬億佛土の遠き距離
 をも去こ此不遠こつてはちかと云ひ、娑婆の終はりは極樂の初門しよもんと境次相きやうじさう
 接まして一念に大悟たいごするから、大無量壽經に能於掌中持のうをせうちゆうぢ一
 切世界さいせかいと申してあります。斯る妙趣は報告に接する時と
 場に無量無邊の一心無際無涯の法界の大總相は吾人胸
 中の妙景となり、一粒能藏三千大千世界半升鐺内煮山川
 と云ふも、一蕊三千世界香と云ふも皆な這裏の消息とな
 るのであります。誠に此の信念は宇宙の大光明に同化し
 たと申しまじよか、無盡藏の大富貴を吾人の心靈上に降
 誕せしめたと申しまじよか、茲に至ては兩肩に戴へる大

盤石の重き罪も大氣の如く軽く、胸間に迫れる生死の怒
 濤も相道を履むが如く、實に自由自在の境界であるから、
 此の起信論も佛陀の圓覺心の一面に奪ひたる一心、一論
 半面に躍動せる救世者の使命として見る時は手に持つ
 珠數も菩提の爲めに非ず、生死岸頭に自由を得たる證、身
 に纏ふ袈裟も衣も生死岸頭に自由を得たる姿となり、人
 生五十は極樂の旅行にして、花紅柳綠山紫水明山の高さ
 水の長さ天地の風景を眺め愉快の月日を送つて経過す
 る道中でありませう。大英雄の希望と大聖人の慰は未來の
 信仰にあると申しまじよか、眞實であるたると思ひませう。
 ソクラテスは未來の存在を信し、靈魂の不滅を説いて死し

ロビンソンは醫師に見棄られて死する時、未來の存在を信じて死するは斯く平易なるものかと申しました、ズ井デン、ボルクも死に頻せる時、友人に心中の様を問はれたるに、未來の存在と神の實在を信じたる上は、幼時老母の家を訪はんとする時の如しと申しました、又佛國の詩人ユーゴは申しました、人は云ふ靈魂は存しないもので唯體力の結果である、然らば予は體力の衰ふと同時に益光澤を加へたる予の靈魂如何、是靈魂の存在して未來の信念を有する證たと申した、又未來の信念を有するものは死は嚴寒予の頂上に宿る心は永久の春の如しとも、又切り倒されたる木の如く一陽來復せば再び新鮮なる萌

芽を吐き愈活潑に斷り株より發生するが如き感とがあるものであります、實に未來の信念を有するものは生涯の終りに近くに及べば、他の靈界の美音は益々明瞭に耳の慶に響くを覺ゆ、又此の人の爲には生涯の終は一日の業を終へたかの如く、明朝は又再び始めかけらるゝの信念を有してをります。

超世の悲願さゝしより

我等は生死の凡夫かは

有漏の穢身はかわらねど

心は淨土にすみあそぶ。

此の復雜なる塵世に處しつゝ、人の知らざる靈界の別荘

に出入し、人の知らざる勝友を得て朝なく、報佛の功德を持ち乍ら起き、夕なく、彌陀の佛智と俱に臥し、胸襟を相開ひて心を慰めつゝ、此の世に存する間は動靜出沒惟是佛陀を憶ひ己を忘れて佛陀の心光中に働くのであります。

第十章 感謝的永久の行動

此の世は予の本國にして、此の永久の花を得たる手を護りしも此の世であります、又此の無限の玉を握りたる身を護りしも此の世であります、予の爲には此世は恩人中の恩人でありますから、此の恩を謝せねばなりません、此

の感謝的行動は極樂道中の琴人生五十年旅行中の手すさびてありまして、大安慰の上であるからは、如何に苦い事業にても其心術に至りては愉快であります、抑吾人をして至大至安の妙境に送り入れたる恩惠の至高至大無限無際なることを回想せば其感謝的の仕事は亦た永久の一事業でありまして、一度世を辭するも、又用意整頓して此の世に降誕し事業を繼續するのであります。

安樂淨土にいたるひと

五濁五濁惡世にかへりては

釋迦牟尼佛のまどくにて

利益衆生はきはむなり。

各位の御計畫は如何でありますか、先私は將來の永劫計畫の事業として、天下理想界の先驅者となり、國家重要な忠良となり、陰に陽に佛陀の福音を宣布し、陛下の盛徳を賛揚して、以て救世主の使命を全ふすること宛かも起信論の著者馬鳴菩薩の如き、天晴中外を霑被する底の事業を來世も來々世までも繼續して、最趣味ある最人生に利益ある感謝的行動を何時く迄も擴張いたしたいといふ考であります。

私とや死ぬ 永の御世話の 御禮には

また出なをして ゆつくりとくる。

嗚呼妙趣、妙趣、此の妙趣は大乗の先驅者たる馬鳴菩薩の

著に懸る起信論に躍動してあるのでありますから、馬鳴の鴻恩を謝せねばなりません、ところが借感謝を表するには如何なる方法を取らん乎といふに、そもくすべて報謝としては何によらず、その恩惠者をして満足させるのが第一必要で、最上乘の方法であるのであります、而して陛下の鴻恩に謝する方法は陛下の大御心に契ひ、陛下の御満足あらせらるゝ様にするのです。

馬鳴の鴻恩に感謝を表する方法は他はありませぬ、救世主の使命に信順するのであります、これが馬鳴の最満足せらるゝことであろうと考へます、使命に信順するとは、馬鳴の高説に同化して、佛陀の勅命に契ひ、溢る

百二
よ如き熱誠なる佛陀の恩惠、大悲の佛心を御満足ある
よう、佛陀の御心の上に大安慰を得ることであり、
自から大安慰を得るのが、即陛下と佛陀と馬鳴とに對
し奉りて、感謝的行動の第一着歩、端著であります、實に
難有ことではありませぬか、まして將來自ら永遠に第
二の馬鳴となりて、救世主の使命を全ふして、陛下と佛
陀とに對し奉り、無限の鴻恩を謝することが出来ること
として見れば、いよゝゝ救世主の使命を感戴すると、俱に
第一の馬鳴に感謝せねばならぬではありませんか、各
位とぞ、私に御同情あらんことを促します、私への同
情は、即馬鳴菩薩への同情で、即佛陀への同情で、又即各

位の利益であります、馬鳴菩薩の本懐として満足せら
るゝ所であります、古來の例によるに、三寶に對して歸
敬するが儀式なるも、私は此の妙趣に接して、馬鳴菩薩
の鴻恩忘れがたければ、講演の話題に備へて、其の恩を
謝するのであり升。

理想の眞宗 終

明治卅四年四月十五日印刷
同年同月三十日發行

三重縣員辨郡丹生川村

著作者 佐藤巖英

京都市油小路御前通上

發行者 清水精一郎

京都市木津屋橋堀川東入

印刷者 井出時秀



不許
複製

發行所

京都市油小路
御前通上

興教書院

發賣所

東京市本郷四丁目

文明堂書店

(電話本局九百拾九番)

明治卅四年四月十五日印刷
同年同月三十日發行

三重縣立洋書館發行

著作者 佐藤 巖 英

京都市油小路御前通上

發行者 清水 精一郎

京都市本津岸橋堀川東入

印刷者 井出 時 秀

發行所 京都市油小路御前通上

興發堂

發賣所 東京市本町四丁目

文明堂

(電話本町四丁目)

見山龍勢師演述 中谷淨林師編纂

第四帖目二首の詠歌説教

新 版

夫秋モサリ春モサリテ年月ヲ送ルコト昨日モスキ今日モスク乃至「ヒトタビモホトケヲタノム心」コソマコトノリニカナフミチナレ等と。三首の御詠歌を遊ばされ。御親切に法義を勸め玉ふ。大悲の善巧のほど世に有難き興由の御文章なり。本書はこの寶章を費題として。席を四十座に分ち譬喩因縁を交へ。懇々切々説教せられし良書なり。
美濃石河仲將師述

信心獲得章説教

三 版

信心獲得章の御文は。同行作四郎大病にて。命旦夕にせまりたる時の御教化なれば。眞最初から信心獲得すといふは。第十八の願のこゝろなるなり等と御諭しなされたり。本書はこの大節なる御文を讀題とし。二十一席に分ち時勢に摘當せる。譬喩因縁を應用し。辨述せし書なり。

菅原如達師編述

三國説法大因縁集

再 版

全二冊實價金五拾錢 郵税金八錢
本書は五種正雜、三寶、六度、五道等の六大部分に分ち。三國の教事因縁を網羅して漏すことなき。一大編輯なれば本書を應用し。故きを温ね新しを知り。以て本宗の妙旨を圓轉自在に唱道せられなば。その補益益し尠少にあらざるを信す。

現生十種之益説教

現 生

福田行忍師閔●勝山善巧師述
一には冥衆護持の益 二には至徳具足の益
三には轉悪成善の益 四には諸佛護念の益
五には諸佛稱讚の益 六には心光常護の益
七には心多歡喜の益 八には知恩報徳の益
九には常行大悲の益 十には入正定聚の益
なりと。今此の十種の現生利益を。一益に二席つゝ都合二十席に分ち。古事因縁。譬喩或は俚諺を以て。明了に説教せられしものなり

實價拾參錢 郵税金貳錢

説教大家 但馬福成寺大仙述

改悔文辨談

實價拾八錢 郵税四錢

故大仙師が三年間自家の土庫中に蟄居して苦心鍛練の塵。出て、一世の聴衆を驚かしたる事蹟は。已に世に喧傳する所あり。蛇足に陥らざる華辨に流れる。直に聴衆の胸琴に觸る。の巧妙あり。實に同師の説教の如き。購て模範とすに足るべきか。乞ふ一本を購讀して其實を知り給へ。 蔚田楚雲師編述 筑紫大徳法話餘瀆

再版 譬喻 一口法話

實價金拾四錢 郵税金貳錢

右は第一開法の用意。第二求法心の部。第三安心の部。第四報恩の部。第五掟門の部。と全編の中之を五門に分ち。部門毎に摘切ある譬喩因縁を合法し。誰人にも能く解する様親切に教誨せられしものにて。親しく明師に面語するが如し。以て法味愛樂の助縁とあし給はんことを。

説教大家 梅原教願寺説教

聖人一流章説教

實價拾五錢 郵税四錢

聖人一流章は御文章八十通の中に於て真最初に御述せらる。故に御書切めの御文と云ふ。實に聖人一流御勸化の趣。運如上人御一代御化導の要義。この一章に盡在す。今この大切なる御文を讀題とし。全編を二十一席に分ち。一席毎に嶄新なる譬喩確實ある因縁を交へて氏の能辨を以て説教せられし其書あり 淨信房説教

慧燈御傳記勸誘録

實價二十二錢 郵税四錢

右は中興蓮如上人の御一代御苦勞の事蹟を誰にも能く解し易き様。譬喩因縁を取ませ説教せられしものにて。之迄木版五冊ものありしを縮刷せしものあり

前田慧雲師著

通 眞宗問答

四版

全編一百四十餘の問答より成り、初め眞宗歴史の大略を明し、叙述の問往々警醒の語を挿めり、次に眞俗二諦の法門を佛敎の大體より解釋を下して、斬新奇抜の議論頗る多し。後に餘論として、哲學上宗敎上道徳上國家上より、耶蘇敎及びユニテリアンと比較對論せり、行文尤も平易にして何人も解し難からず。近來大好評の著書あり、

同師著

通 大乘佛教問答

正價金拾五錢 郵税金貳錢

右は大乗究竟の法門、即諸法實相の道理を極めて平易に説き明して、尙ほ其上にも少し難解の嫌ある文字章句には、丁寧な注解を加へ、餘論を付したる者あれば、佛敎青年會或は諸宗小敎校の、初等科の用書には至極恰好あり

前田慧雲師著

眞宗敎史序論

定價金貳拾錢 郵税金四錢

全篇を原理篇の組織篇の濫觴篇の系統篇の發達篇の五篇に分ち、原理篇に於て、聖道淨土の一致に歸することを辯論し、組織篇に於て、眞宗の組織即眞俗二諦の交渉關係を詳述し、濫觴篇に於て法門の緣起、釋尊の選定、并に七祖の系統篇に於ては眞宗七祖の如く然ることを論述し、發達篇に至て七祖の論格及び宗門の形變遷より、以て三經釋軌、法相施設の發達進化的の概略を概論せり、

前田慧雲師講述

佛教古今變一班

新著

本書は三論天台の聖道諸宗より、淨土門眞宗に至るまで、就れの宗旨も皆時勢の刺戟、世間的學說の影響を受けて、其教義が變遷進化したる模様を詳かに説明せられたり、殊に眞宗の學者は、宗乘を研究するに就ての、殊に眞宗法を此書に取られれば、後來大に其發達を見ることがあらん、

是山惠覺師編纂
本願寺歷代宗主傳

高祖 親覺上人 第二世 如信上人 第三世 覺如上上人 第四世 善如上上人
 第五世 實如上上人 第六世 巧如上上人 第七世 存如上上人 第八世 蓮如上上人
 第九世 良如上上人 第十世 證如上上人 第十一世 顯如上上人 第十二世 准如上上人
 第十三世 法如上上人 第十四世 寂如上上人 第十五世 本如上上人 第十六世 滄如上上人
 第十七世 大如上上人 第十八世 文如上上人 第十九世 宗如上上人 第二十世 廣如上上人
 右はたれにも能く解する様平易に御廟山聖人より前宗主に至るまで二十世間の歴代宗主の傳記大小の事跡を立知師の本願寺通紀宏遠師の大谷略譜により尤も確實に尤も平易に編纂せられたるの事跡を云何に歴代の善知識がその御存生中宗教の爲め國家の爲め力を致されたるがを知らんと欲せば乞ふ一讀あらんことを

七聖恒順師言行遺錄

右は明治佛敎界の大徳、万行寺七聖和尚の遺勳績を大に集蒐し、一は以て和尚御存生中親しく慈誠せられたる盛徳を追慕し、一は天下同情の緇素道俗と共に、法味愛樂助縁に供せんとて編集せしものあり○編中師略歴○言行錄○和尚の垂誠○書簡○法語斷片○法語筆録○處世用心○敎導家の模範○雲照と恒順等の數編あり○遺稿としては福澤諭吉氏と和尚との問答梅霖閑談○二種深信釋○信心稱報等あり

眞道德新編内編外編合本

内編には眞道德の原理を詳説せり○外編上下十二章二十一節の章段を分ち、其の應用の法を示し眞宗素の徳義の方針を指示するに、祖師の慈訓蓮師の訓言並に本派大派先哲の偉行善容の從來未だ世人の知らざる所の面白き者を蒐録せり、實に眞宗に浴するは龜鑑として座右缺ぐべからざる良書あるを信せ○尙眞宗僧俗の心得とあるべき箇條八章數十節を増補せり

菅原如達師述

良敎 **勸導薄照**

實價廿六錢 郵稅六錢 版三

凡そ勸導の證たるや文あり義あり事あり喩あり、喩は機變に臨應すべく、事は群典に散在すべし、義は相承の口訣に從ひ、文は脈祖の訣中よりするときは詞料を乏しからせ、勸導薄照は和漢に通じて、文義喩事の類文を部門を訂正標註し縮刷とす、以て古を蕪ね新しきを知り玉へ、

栗津義生師述

帳中五十座 **法談**

實價廿六錢 郵稅六錢 版三

右は法華三經七祖の肝要の文を讀題として説教せられたる帳中五十座法談、卷懐五十座法談を訂正標註したる都合百座の説敎良書これに代りしからにして、隨聞せられ得るは實に此書にしかた

定價貳拾五錢 郵稅四錢

三原雪編纂

○前田慧雲師著 ○定價貳拾五錢 郵稅四錢

二種深信講話

實價拾六錢 郵稅金四錢

全席三十〇目次は畧す○信機信法の二種深信を論せ、苟も領解の正邪を糺さんとするに至るは、必此釋を以て模範とせざるはあし而して世に尚ほ其與義を、平和に演暢したるもの稀にあり、此著偶々改良説敎の趣意に基き、毎席の趣嚮を豫定し、往々譬喩因縁を引き、上實に使用の良書とす、

松村海印師述

二種深信講話

實價拾六錢 郵稅金四錢

和讃法話

實價廿五錢 郵稅四錢

本書は故周防徳證寺梅香師が、凡夫往生の手本たる觀無量壽經を讀題とし、十九席に其大意を説教せられたるものあり、

御式文の歎徳文をもつす
祖馬福成寺大仙師述 (美本二冊) かなつき

御繪傳指圖 實價四拾五錢 郵税金八錢

古來この御繪相に就ては未だ其確實にして、
而かも其詳細あるを見ず、幸にして、茲に有
名なる、福成寺大仙師 (俗にチャリセンと稱
す) の詳細に一々指圖せられし、珍らしき寫
本五冊を得たり、之を見るに先づ

彩色に夫れ、表示ある事、松竹梅櫻柳紅
葉等皆各々深旨ある事、菊、朝顔、萩、百
合等一樹一草一花一葉悉く深旨の表示ある
事、僧俗ともに人眞には定りありて各々指
名せる事其他妻戸屏風等の繪相に至るまで
、悉く其表示ある事上下十五段を述べて、
一々師の滑稽辯を以て、聖人御一代御化導
の事蹟を細大漏すなく、譬喩因縁を交へて
説教しつゝ、悉く指圖せられたり、尙大に訂
正を施し、一段、御傳鈔本文を加へた
り、尙繪解便利の爲細密なる、彩色七度摺
、四福御繪相の縮圖を附録とす

右縮圖ダケ御注文ナレバ
四幅御繪相縮圖 實具シタル分 廿五錢小包十六錢
無表具繪ダケ代五錢郵一錢
同

荻野行達師說教

善導百席談 上下二冊 實價五拾錢 郵税金八錢

御開山は高僧和讃に於て、大心海ヨリ化シテ
ユン善導和尙トオハシケン末代濁世ノタメニ
トテ十方諸佛ニ證ヲコフ等と、二十六首に御
讚歎遊ばされたり、

右百席談は荻野師が、此の御和讃二十六首を
讀題とし、百席に分ちて唯人にも能く了解す
る様、譬喩因縁を交へ本年六月、三十日の間
本山總會所に於て説教せられ、大に高評を博
されたる尤も斬新なる實地の説教筆記なり、
有志の所望多き故に師に乞ふて、更に訂正増
補の上出版せしものなり、

愚迷發心集直談 實價廿錢 郵税金四錢

愚迷發心集は無常を感じ、發心して菩提を求
むるに、助縁となる良書なり、今この直談は、
鼓吹の如く、文々句々詳細に講談しつゝ、内
典外典に涉り、廣く無常を教誡せし、故事因
縁、譬喩合法の諸文を集めたり、實に此の書
は日頃の懈怠を策勵する良書なるを疑はず

大仙師御傳鈔講話

御傳鈔講話 全貳冊 版三第

實價金五拾錢 郵税金八錢
會て聞く義主師兄弟三人あり、而して一は漢
學に達し一は文章に達し師は博學ある能辨家
にて、常に三人の學力を棟て一の書籍を組織
すと、宜かる哉同師の説教者の天下に有名に
して其利益の大あることを、

のにして、聖人行化に寄せ、讚嘆せられたるも
人御在世の御行狀を、拜讀するを得るは、實
に覺如宗主の賜あり、然れども其文簡短なれ
ば、我々其委細を知る能はざらば、今此の
講話は、義主師内典外典諸書を纂涉し、聖人
御化導の事蹟、開宗の模範等、細大漏すなく
師の能辨博識を以て、誰れ人にも能く解する
様、譬喩因縁を交へ、説教せられたるものあ
り、

任其師述 大仙師述 第二版

報恩講式文説教 實價廿錢 郵税金四錢

本書は福成寺大仙師が御式文に就て譬喩因縁
を交へ最も簡明に辯説されし者

深廣師述 (元深廣録) 實價四拾錢 郵税金六錢

御傳鈔説教録 實價四拾錢 郵税金四錢

粟津義主師述

御傳鈔法話 實價四拾錢 郵税金四錢

通二河白道講話 三版 全一冊

一名護信録 實價拾六錢 郵税金四錢
今此の御文は善導大師念佛者の信心を守護せ
ん爲め、貪欲瞋恚の二河に譬を御説きされ
しものあり、故に此の御文を守護信と云ふ
既に御和讃に貪瞋二河の譬喩をとり、弘願の
信心に守護せしむと、かゝる眞宗に取ては實に
安心に大關係ある御文を、誰れにも能く解す
る様、種々の譬喩因縁を諸書より引き、師の
能辯を以て講話せられたるものあり、

徳川義禮侯爵題字 奥田貫昭大僧正題字
大内青齋居士題字 高田道見師跋

明治説教因縁五百題

大和綴製本美麗 上下貳冊紙數凡八百頁
内地雜居將に實施せられたるの今日、從來の
如く事實に相違せる妄誕不稽なる奇怪の因縁
談を以て法を説き教を布かむは却て其信仰を
失はしむるものにして實に於て維新以後の
背く萬々ありと云ふべし爰に於て維新以後の
新事實あるもの無慮五百題を蒐
是を孝子、忠僕、義勇、貞女、烈婦、愛友、
正直、懺悔、靈驗、往生、勤勉、惡業、雜部等
の諸部に分ち各部ごとく贊題を附し引用に適
せる和歌を掲げたれば布教傳道に従事せんと
るもの此一軍隊布教を試むるを以て
巻を手にし軍隊布教を試むるを以て
すべし監獄教誨を惡業等の部を以てす
くく婦人傳道を婦の部を以てす
を教化せむにも職本書は好材料
工に説法せむに常にも職本書は好材料
るべし故に布教傳道に従事せる諸氏は必
本を購求し常に携帶して其實用に充てたまへ

栗津義圭師述 かあつき

四十八願喚鈔

右は師の能辨を以て大經四十八願を講題とし
て一願々々に譬喩因縁を交へ説教せしむる也

栗津義圭師述 かあつき

和讀即席法談

右は師が淨土和讀を講題として説教の好材料
を與へらる

栗津義圭師述

正信偈勸則

栗津義圭師述 郵税 四拾貳錢

高僧和讚開導

栗津義圭師述 郵税 四拾貳錢

正像末和讚可説

菅原如達師述 郵税 四拾貳錢

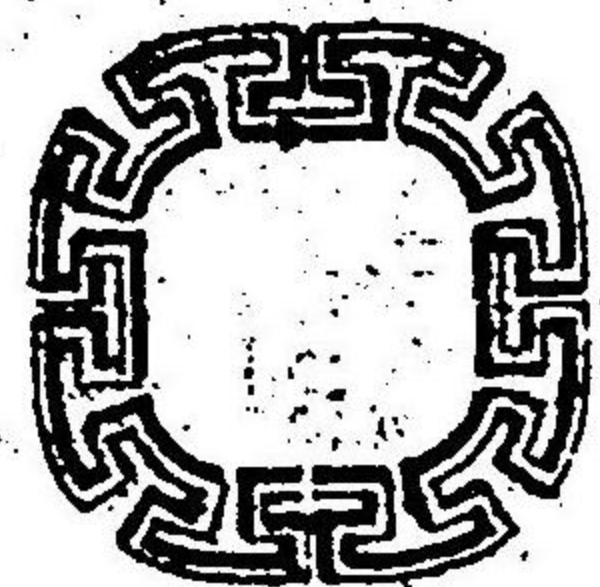
阿彌陀經依正譚

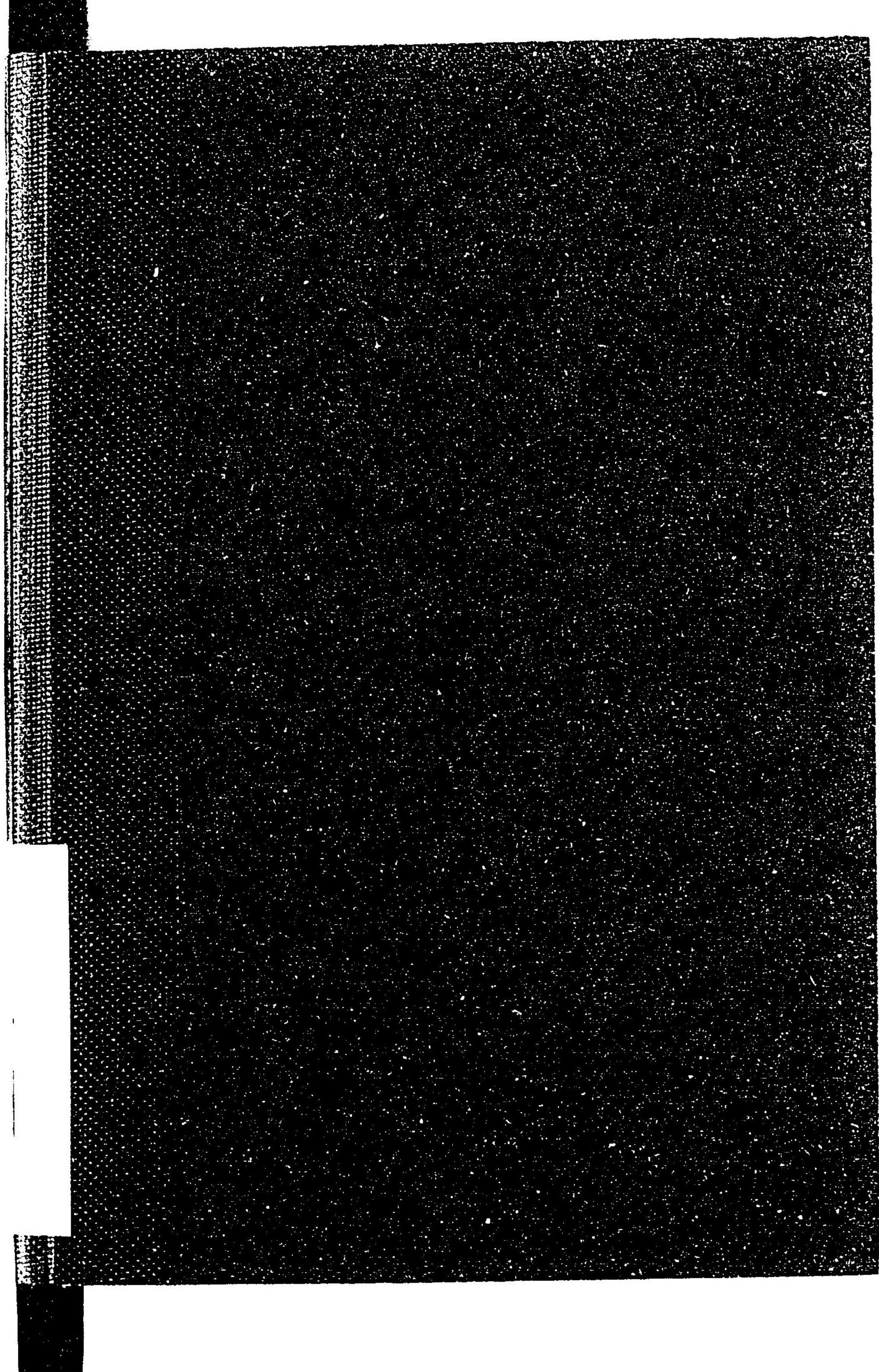
栗津義圭師述 郵税 四拾貳錢

説教良辯集

栗津義圭師述 郵税 四拾貳錢







特 18

508

理想の真宗

国立国会図書館

019229-000-5

特18-508

理想の真宗

佐藤 巖英/著

M34.4

ABF-2821

